

平成 24 年度

千葉大学先進科学プログラム入学者選考課題

課題論述

実施時間 [9:00－17:00]

課題 II-D, II-E

(10:00－15:30)

注意事項

課題Ⅱには、[Ⅱ－A]、[Ⅱ－B]、[Ⅱ－C]、[Ⅱ－D]、[Ⅱ－E]の5題があります。

志望するコースによって、次に示す問題を解答してください。

- ・物理学コース：
[Ⅱ－A]、[Ⅱ－B]の2題を解答してください。
- ・フロンティアテクノロジーコース
[Ⅱ－A]、[Ⅱ－B]、[Ⅱ－C]の中から2題を選択して解答してください。
- ・人間探求コース：
[Ⅱ－A]、[Ⅱ－B]、[Ⅱ－C]、[Ⅱ－D]、[Ⅱ－E]の中から2題を選択して解答してください。

II-D 以下の文章を読み、問いに答えなさい。

「自分は価値のある人間だろうか？」あるいは「自分はダメな人間なのではないか？」など、あなたも自分自身の存在価値について一度は考えたことがあるだろう。心理学では、自分を価値あるものと考えたり肯定的にとらえる感情を、「自尊心」や「自尊感情」と呼ぶ。そして、自尊心をはかるための指標の1つとして、ローゼンバーグの自尊心尺度がよく使われている (Rosenberg, 1965)。

この尺度 (翻訳版) は 10 項目からなる。検査を受ける人は、各項目に書かれた内容が回答者自身にどれくらいあてはまるか、「あてはまる」(5 点) から「全くあてはまらない」(1 点) まで 5 点満点で回答する。10 項目の合計点 (50 点満点) が、検査を受けた人の自尊心の高さを表す。ただし、下の例 2 のように、自尊心とは反対の質問項目は、「あてはまる」を 1 点とし、「全くあてはまらない」を 5 点とする。

ローゼンバーグの自尊心尺度の質問項目：

例 1. “I take a positive view of myself” 自分に対して肯定的である

例 2. “All in all, I am inclined to feel that I am a failure” 敗北者だと思うことがよくある

東洋人は西洋人に比べて自尊心が低いことが指摘されている。ハイネらがおこなった調査 (研究 1) の結果では、ヨーロッパ系カナダ人大学生 (1657 名) の平均値が 39.6 だったのに対し、日本人大学生 (1402 名) の平均値は 31.1 と低かった (Heine, Lehman, Markus, & Kitayama, 1999)。図 1 は、各自自尊心点数の人数分布を表している。

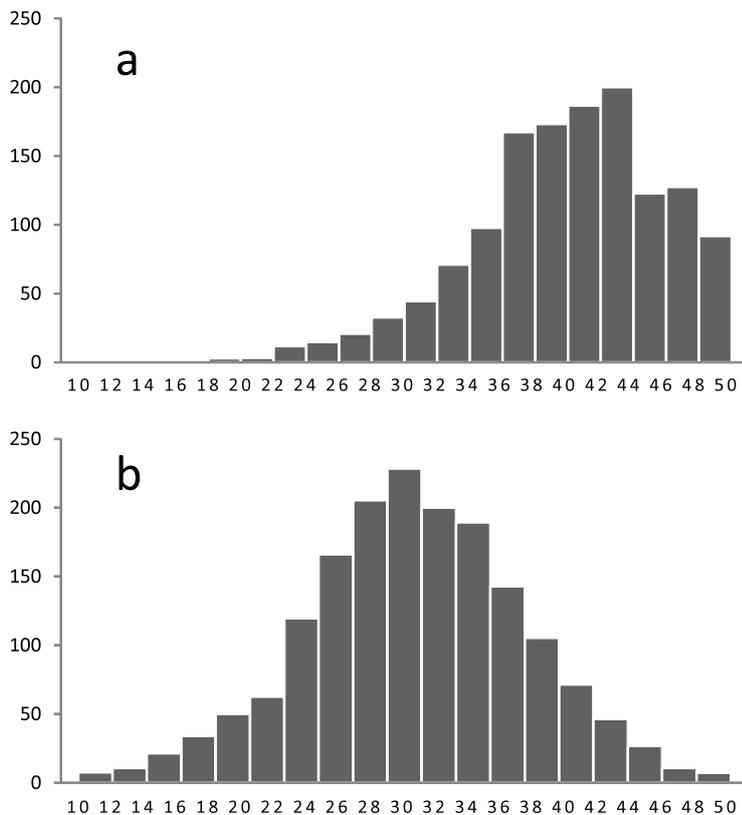


図 1：研究 1 の結果—カナダ人大学生 (a) と日本人大学生 (b) の自尊心点数の分布

これらの知識をふまえたうえで、自己評価と文化差に関する研究を紹介する。

分析対象者：

ヨーロッパ系カナダ人大学生 95 名，日本人大学生 80 名

手順：

- ① 【認知能力検査の実施】 まず実験参加者は，20 題からなる認知能力検査に回答する。この検査は，画面上に示される色がつけられた多数の図形の中から，指定された色・形の図形の数をできるだけ速く正確に数え，キーを押して答えるというものである。例えば，「黄色い星形は赤い円形よりいくつ多いか」といった課題である。参加者は，それぞれの問題ごとに，どのくらい速く正確に判断したかをもとに得点が算出されると説明された（そのため，回答中に参加者自身が自分の成績がよいか悪いか判断することができない）。
- ② 【判断力検査の実施】 次に実験参加者には，先におこなった認知能力検査の得点を，1 題ずつ提示された。その際，参加者自身の点数とともに，参加者の所属する大学の平均点もあわせて提示された。参加者は，（1 題ごとの点数ではなく）自分の認知能力が大学の平均よりも高いか低い判断できたらすぐに，その判断を報告するよう求められた（注 1）。さらに，自分がおこなった判断がどれくらい正確か，確信度を答えさせた（1：全く自信がない～9：非常に自信がある）。

提示される結果は最低 5 題で，5 題目の結果提示後に「判断のためにさらに課題の成績が知りたいか」という希望を尋ね，希望に基づき 20 題まで 1 題ずつ課題成績を提示した。

ただし，参加者に伝えられた点数は，真実の結果と異なっていた。自身の点数と大学の平均点の優劣を入れ替えながら，「優位グループ」と名づけられたグループの参加者には，20 題の平均が大学の平均点よりも高くなるように，残りの半分の「劣位グループ」には，自分の点数が大学の平均点よりも低くなるように操作されていた。
- ③ 最後に，実験の真の目的と実験操作について説明がなされた。なお，実験はすべて，パーソナルコンピュータを用いておこなわれた。

結果：

参加者が最終的な判断を下すまでに希望した成績の個数を「成績の提示個数」と呼ぶ。例えば，成績の提示個数が 7 であれば，最終的な判断をするために，最初の 5 題分の成績に加えて，2 題分の成績を追加で希望したことを意味する。

分析対象者の国ごと，グループごとの確信度と「成績の提示個数」の平均値を図 2 に示した。

※注 1：実験参加者に自己卑下的かどうかを判断する実験であることに気づかせないため，実験者は「限られた情報を基に判断する能力を検討するため」というみせかけの目的を実験参加者に伝えていた。

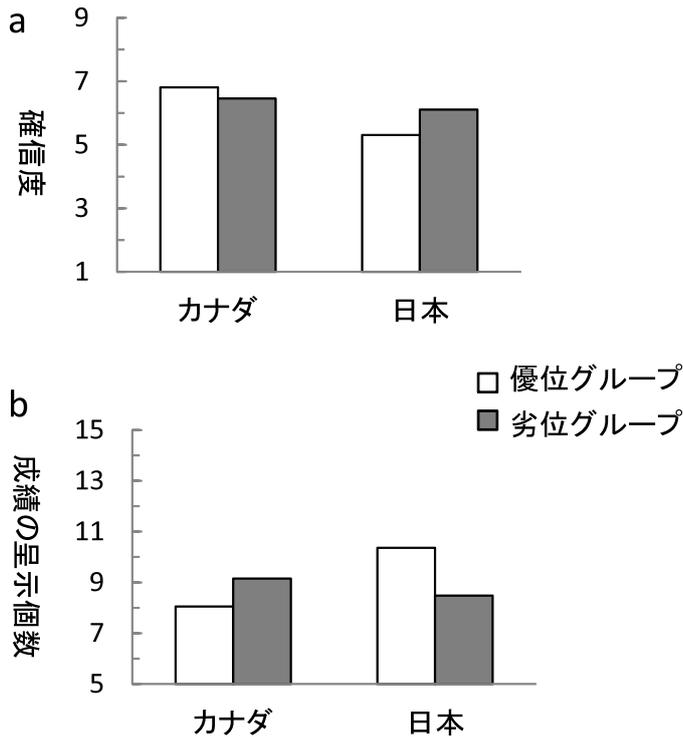


図2：研究2の結果—カナダ人と日本人の各条件における平均確信度 (a) と成績の平均提示個数 (b)。

図2から分かるように、日本人においては、優位グループよりも劣位グループで自己判断に対する確信度が高く、ヨーロッパ系カナダ人ではそれが逆転していた。この結果（注2）から、ハイネたちは、カナダ人は優れた自己評価を受け入れやすく、逆に日本人は、自分が劣っているという評価を受け入れやすいと結論づけている。

問1：

- (1) ハイネらは、文化的背景の違いによって自己評価のあり方に違いが現れることを示すために、研究1に加えて研究2をおこなった。同じ目的をもった研究であるにもかかわらず、研究2では、研究1と異なる手法を用いて同様の検討をおこなったのはなぜだと考えられるか、説明しなさい。
- (2) この実験では確信度以外に成績の提示個数が指標として用いられたが、ハイネらは、この指標をどのような意図のもとに測定したと考えられるか、説明しなさい。

※注2：日本人における優位グループと劣位グループの差は、統計学上、偶然では考えられない大きさの差であることが確認された。また、日本人とヨーロッパ系カナダ人とでは結果のパターンに違いがあることが確認された。

ハイネの共同実験者である高田は、この実験をさらに発展させて、次のような実験をおこなった。

研究3：高田の実験 (Takata, 2003)

分析対象者：

日本人大学生 47名

手順：

研究2 (ハイネらの実験) の手続きを一部変更して実施した。

変更箇所は、

- ① 認知能力課題についての説明する時、参加者の半数に対して、成績がよい方の参加者に賞品が与えられると伝えた (競争条件)。残りの半数に対してはこの情報は伝えられなかった (非競争条件)。
- ② 判断能力課題において、自分自身の能力と一緒に実験に参加している相手の能力のどちらの認知能力が高いかを判断するよう求められた。したがって、自分自身の結果と「一緒に参加している相手の得点」が提示された。
- ③ 確信度の回答は、「全く自信がない」(1点) から「非常に自信がある」(7点) とした。

結果：

成績の平均提示個数：

競争条件：劣位グループ 15.38	優位グループ 9.14
非競争条件：劣位グループ 8.75	優位グループ 13.00

確信度の平均値：

競争条件：劣位グループ 4.65	優位グループ 5.29
非競争条件：劣位グループ 5.62	優位グループ 4.78

問2

- (1) 高田が研究2とは違う手順 (上記①) を導入した理由はなにか、説明しなさい。
- (2) 研究3の結果、研究2と比較してどのような変化が見られたか、説明しなさい。その際、説明しやすいように実験結果を図示しなさい。

自己評価には様々な側面があるだろう。小林らの詳細な報告をもとに考えてみたい

研究 4：小林らによる調査 (Kobayashi & Brown, 2003)

方法：

- ① 調査参加者 日本人学生 54 名とアメリカ人学生 59 名を対象
- ② 調査参加者の選定 参加者が所属する学校において事前におこなわれた大規模調査においてローゼンバーグの自尊心尺度を測定し、その得点が、参加者全体のうち下から 30%に含まれる人（以降、低自尊心グループと呼ぶ）と、上から 30%に含まれる人（高自尊心グループ）を調査の対象とした。自尊心尺度には、「全くあてはまらない」（0 点）から「非常にあてはまる」（3 点）で回答してもらった。アメリカ人参加者のうち低自尊心グループ（24 名）の平均は 17.21、高自尊心グループ（35 名）の平均は 27.37 であった。日本人参加者のうち低自尊心グループ（29 名）の平均は 10.17、高自尊心グループ（25 名）の平均は 23.64 であった。
- ③ 調査項目 有能さ、忍耐力、といった人の性質を表す 8 項目（表 1 参照）をとりあげ、参加者自身がその性質にどの程度当てはまるか、「全く当てはまらない」（1 点）から「非常によく当てはまる」（7 点）まで点数で回答することが求められた（例えば、自分に非常に忍耐力があると思えば、忍耐力の項目は 7 点といった具合に回答）。同様に、参加者の親友と自分の大学の多くの学生についても同様に、各項目がどの程度よく当てはまるか回答することが求められた。これに加え、それぞれの性質を持ち合わせること（例えば、忍耐力を持ち合わせること）がどれほど重要か、同じく 1～7 点で回答することが求められた。

結果：

参加者のグループと国ごとに回答の平均値を算出し、表 1 にまとめた。

表 1：研究 4 の結果 — 各項目についての参加者グループごとの平均得点

	日本		アメリカ	
	低自尊	高自尊	低自尊	高自尊
▶有能さ				
自分自身について	3.28	5.04	5.54	6.40
他の多くの学生について	4.76	4.60	5.04	5.71
親友について	5.38	5.16	5.54	6.20
重要度	5.24	5.28	6.00	6.34
▶人生を楽しんでいるか				
自分自身について	4.48	5.48	5.29	6.69
他の多くの学生について	4.28	3.56	5.13	5.49
親友について	5.72	5.56	5.58	6.31
重要度	6.45	6.00	6.46	6.83
▶友好的か				
自分自身について	4.90	4.96	5.33	5.89
他の多くの学生について	3.86	3.92	4.46	4.89
親友について	5.35	4.88	5.79	6.49
重要度	5.03	4.64	5.83	6.23
▶謙虚さ				
自分自身について	5.24	4.76	5.04	4.94
他の多くの学生について	4.28	4.56	3.83	4.11
親友について	5.17	4.88	4.54	4.91
重要度	4.55	3.72	4.54	5.23
▶忍耐力				
自分自身について	4.83	5.08	4.75	6.00
他の多くの学生について	4.83	4.04	4.88	5.20
親友について	5.28	4.84	5.04	5.63
重要度	5.55	5.12	5.38	5.69
▶責任感				
自分自身について	4.79	5.08	5.83	6.51
他の多くの学生について	4.72	4.64	4.83	4.94
親友について	5.31	5.44	5.33	5.94
重要度	5.72	5.80	6.25	6.66
▶よい友人関係を築いているか				
自分自身について	5.79	6.20	6.42	6.80
他の多くの学生について	4.45	4.24	5.04	5.40
親友について	6.07	6.00	6.08	6.43
重要度	6.48	6.32	6.08	6.63
▶好かれているか				
自分自身について	4.21	4.48	5.21	6.06
他の多くの学生について	4.00	3.68	5.54	4.91
親友について	5.86	5.48	5.96	6.29
重要度	6.00	5.32	4.71	5.00

問 3：

表 1 から、日本人とアメリカ人、それぞれの評価においてどのような傾向・特徴があるかを説明しなさい。このとき、あなたの主張が分かりやすくなるように、表のデータの一部を抜き出したり、データを組み替えたり、工夫して図を作成しなさい。

問4：

- (1) これまでに紹介した調査や実験の結果から、日本人の自己評価・自尊心に関してどのようなことが言えるか、問1～3をふまえながら論じなさい。
- (2) 自己評価・自尊心における文化による違いを説明するためには、これまで紹介した調査・実験だけでは不十分であろう。実験・調査のどのような点が問題であり、どのように修正・改善すれば、さらにどのようなことが分かるのか、あなたの考えをまとめなさい。

出典：

Heine, S. J., Lehman, D. R., Markus, H. R., & Kitayama, S. (1999). Is there a universal need for positive self-regard? *Psychological Review*, Vol. 106, Pp. 766-794.

Heine, S. J., Takata, T., & Lehman, D. R. (2000). Beyond self-presentation: Evidence for self-criticism among Japanese. *Personality and Social Psychology Bulletin*, Vol. 26, Pp. 71-78.

Kobayashi, C., & Brown, J. D. (2003). Self-esteem and self-enhancement in Japan and America. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, Vol. 34, Pp. 567-580.

Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton, NJ: Princeton University Press.

Takata, T. (2003). Self-enhancement and self-criticism in Japanese culture: An experimental analysis. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, Vol. 34, Pp. 542-551.

II-E

文章 A と B は共通のテーマで読み解くことができる。そのテーマとは何かを考えながらこの 2 つの文章を読み、以下の問いに答えなさい。

問 1

文章 A では、「大人たち」による「若者」の評価について議論している。この議論の内容について論点を整理し、それぞれの項目について、自分が同意できるか、できないかを、その理由とともに述べなさい。

問 2

文章 B 二重線部（6 ページ 4 行目）の「他者イメージ」とは何かわかりやすく説明しなさい。

問 3

- (1) ヨーロッパ人がもつ「オリエンタリズム」はどのようなものか。また、オリエンタリズムは「西洋」と「東洋」の関係の中でどのように作用すると考えているか、著者の問題意識が明らかになるよう具体的に説明しなさい。
- (2) (1) をふまえ、文章 B 冒頭の破線部に述べられたフランス人ジャーナリストの態度はどのような点が問題か、わかりやすく説明しなさい。

問 4

文章 A と B の議論に共通する点をまとめたうえで、それに対し自分の意見を述べなさい。

文章 A

著作権上の理由により掲載できません。

著作権上の理由により掲載できません。

(河合太介・渡部幹「『いまどきの若者』は本当に考え方が浅いのか？ 新入社員を“タダ乗り”扱いする日本企業の根強い偏見」(ダイヤモンド・オンラインより抜粋 <http://diamond.jp/articles/-/12608> 取得日 2011年7月13日)

注1：ただ乗りする人。ここでは、自ら努力しないあるいはコストを負担せず、利益や便益を受ける人。

文章 B

著作権上の理由により掲載できません。

著作権上の理由により掲載できません。

(エドワード・W.サイード『オリエンタリズム』今沢紀子訳より抜粋)